

IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 154, 2011

VIEW 展望

メディア芸術の振興——はじまりの時 その背景と現状／佐伯知紀…2

INFORMATION 学会組織活動報告

支部・研究会だより 関西支部…3 西部支部…3 東部支部…3
中部支部…4-5 映像表現研究会…5 日本映像学会第 36 回大会収支報告…5

REPORT 報告

関西支部第 61 回研究会「瞬間、身体、連続——アルベール・ロンドの写真実践について」／増田展大…6 東部支部第 50 回デジタルメディア研究会／映像教育研究会「SIGGRAPH Asia 2010 および伯日デジタル放送推進シンポジウムに関する報告」／河口洋一郎…6-7

FORUM フォーラム

藝術学関連学会連合第 6 回公開シンポジウム「アートとデザイン—その分離と融合—」…8

FROM THE EDITORS

編集後記…8

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第 154 号」 2011 年 4 月 1 日発行
発行人：豊原正智 編集担当／総務委員会：岡島尚志(委員長)・古賀太(副委員長)・
岩本憲児・応雄・橋本英治・山田幸平・和田伸一郎・奥野邦利

日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘 2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内
phone：03-5995-8287 / fax：03-5995-8209 / e-mail：JASIAS@nihon-u.ac.jp
<http://jasias.jp/>



日本映像学会

メディア芸術の振興——はじまりの時 その背景と現状

佐伯知紀

3月11日14時46分、東北地方を襲った大地震、大津波、これによる原子力発電所の事故がもたらした未曾有の事態の進行に目を凝らしながら、この文章を綴らなければならない。死者、行方不明者、合わせて2万8千人超。折り重なる痛苦の感情を胸底におさめつつ、「平時」の政策を概観するには無理があると言挙げした上で、以下与えられた役目を果たすことにする。

さて、すでに一昨年のことになる。「国立メディア芸術総合センター」建設の是非が世間の耳目をひいたことがある。マスコミによる「アニメの殿堂」「国営マンガ喫茶」のネーミングの妙もあり、新聞・テレビ・雑誌等で盛んに取り上げられたので、覚えている方も多いと思う。結局のところ、これを「非」とする民主党政権の誕生により、この構想が無駄な公共工事の象徴として中止となったのは、ご存じの通りである。

ただ、ことを政治の文脈とは別にとらえてみると、次のように言うこともできる。この構想は、1998年に始まった「文化庁メディア芸術祭」の広がりや深化のプロセスのなかで半ば自然発生的に生じたものであった。初台の新国立劇場のロビーを用い、来場者2千人の規模でささやかに始まったこの催しは、14回目を迎えた本年は国立新美術館を会場に7万人の来場者を集めるに至っている（部門としては、「アート」「エンターテインメント」「アニメーション」「マンガ」の4部門からなる）。この間、「クール・ジャパン」の主要コンテンツとして、国際的に注目もされた。2001年には「文化芸術振興基本法」が成立し、メディア芸術は、「映画、漫画、アニメーション及びコンピュータその他の電子機器等を利用した芸術」と規定され、国が振興すべき分野ともなった。

ついでながら、この「メディア芸術祭」が「芸術祭」に対するオルタナティブ的一面を有している点は押さえておきたい。1946年秋、終戦後の混乱期に文化芸術の力で国民を勇気づけることを目的として、演劇、音楽、舞踊、能楽部門の祭典として創設された「芸術祭」は、すでに64回を数える。各々の分野において伝統を有する重要な催しとなっていることは、言うまでもないだろう。分かりやすく言えば、「メディア芸術祭」はその「芸術祭」には、含まれない分野のそれとして構想された一面を持っているのである。

なお、映画に関しては、かつて芸術祭の主要部門であった時期があり、またそこから外れて後も、主催公演として実施されており、それについては助成制度の発足という経緯もあるのだが、別の文脈で詳述した方が適切だと思われるので、ここでは触れないことにする。

いずれにしても、上記の「文化芸術振興基本法」成立後、文化庁において、もっとも早く振興施策が講じられたのが、映画・映像分野であったことについては、当学会会員には改めて繰り返すまでもないだろう。2004年からの「日本映画・映像振興プラン」は、翻ってみれば、国が戦後初めて本格的に行った映画政策でもあった。危機感を共有した官民の振興の流れが重なり、2002年に対外国映画比で、27%にまで落

ち込んだ日本映画の興行収入（指標として理解しやすいので用いる）は、ここ数年50%を越える状態を回復、維持しており、昨2010年も53.8%を占めるなど、一定の成果を上げたと言えるだろう。東京藝術大学大学院映像研究科や立命館大学映像学部の創設もこの間のことである。

さて、本題の「メディア芸術」にもどる。上記のようにセンターの建設は不可となったものの、分野としての重要さは現政権においても認めるところであり、平成22年度から「ソフト支援」「ヒューマン支援（人材育成）」の二つの柱を軸に事業を実施している（予算額15億1千5百万円）。以下、簡単に事業概要を紹介しておきたい。

「ソフト支援」では、「文化庁メディア芸術祭」を内外に広く発信するための「地方展（京都・岡山）」「巡回企画展（仙台・札幌・山口等）」「海外展（イスタンブール）」を実施した。また、「メディア芸術デジタルアーカイブ」「メディア芸術情報拠点・コンソーシアム構築事業」など分野総体の将来を見据えた議論の場を設けた。一口にメディア芸術と呼んでいるが、現在この呼称のもとに包含されている分野は、「アート」「エンターテインメント」「アニメーション」「マンガ」の4部門であり、「メディア芸術祭」の分類に準拠したものである。そこでは今後、この分類、部門立てをベースにすべきかどうか含めた検討も行われている。他にも「世界メディア芸術コンベンション」「メディア芸術部門会議」などシンポジウムや横断的な会議も開催した。

一方「ヒューマン支援（人材育成）」では、以下の3事業を実施した。まず、「メディア芸術クリエイター育成支援事業」で、若手クリエイターの創作活動や国内各地の施設が行うワークショップ、公開講座・調査研究等に関する事業を支援した。具体的には、「インターカレッジ・アニメーション・フェスティバル2010」や広島国際アニメーションフェスティバルの「アニメーションクリエイター育成事業（エドケーション・フィルム・マーケット等）」を支援している。次の「若手アニメーター等人材育成事業」では、オン・ザ・ジョブ・トレーニングを組み込んだアニメーションの制作を行い、人材の育成を図った。これは、製作費の縮減、制作の効率化、動画工程の海外発注等に由来する若手アニメーターの払底—それは同時に将来的に分野の疲弊を招くのだが—に対する、一つの「解」として構想された事業で、それぞれ実績のあるプロダクションが短編のオリジナル・アニメーション4作品を制作、発表した。「海外メディア芸術クリエイター招へい事業」では、アニメーション・アーティスト・イン・レジデンスを実施、海外からの86人の応募者から3人（イギリス、フランス、中国）を選抜招へいし、研修・制作の機会を提供した。以上のように、メディア芸術に関しては、昨年度から多様なプロジェクトでその振興を図っている最中であることを、この場を借りてお知らせするとともに、あわせて関係会員のご協力をお願いしたい。それにしても、「平時」が望まれる。

（さいき ともり／文化庁芸術文化調査官・映画・映像担当）

支部・研究会だより 関西支部

大橋 勝

<報告と計画について>

関西支部では、神戸芸術工科大学まんが表現学科・映像表現学科の橋本英治会員のお世話により、以下の要領で関西支部幹事会、第62回研究会を開催しました。

日程：平成23年3月12日（土）

会場：神戸芸術工科大学

研究発表

『ザ・シンプソンズ』が映し出すアメリカ社会」

関西学院大学大学院社会学研究科博士前期課程 永田彰子会員
「石ノ森章太郎『絵コンテ漫画』に見るまんがと映画の関係」

神戸芸術工科大学 山本忠宏会員

永田会員の発表は、アメリカのTVアニメーション『ザ・シンプソンズ』が異例のロングランを続け多くのアメリカ人の視聴者に支持されている理由を、作品内で表現されている家族の形態に見出し、そこに社会学的側面からの分析を試みています。ホフステードやベラーの考察を参照しながら、アメリカにおける個人主義の継承と展開や結婚観と家族像を示しつつも、実は古い理想的な家庭像が支配的であることを発表者は指摘しています。そしてそのような古い理想的な家庭像を潜在的に規範にしつつ、今日的な風潮を戯画的に風刺、批判するところにこのシリーズの特徴があることを、具体的なエピソードを例示しながら分かりやすく説明が行われました。

山本会員の発表は、石ノ森章太郎の映画・映像の要素について検証するため、『仮面ライダー絵コンテ漫画』（1979年、講談社）を詳細に分析するものでした。映画の絵コンテを即、ストーリー漫画にするという石ノ森の実験的な試みは、現実的には映画（絵コンテ）部分とまんがが部分の折衷的な表現として仕上げられており、絵コンテ部分のみを取り出しても、通常の映画構成から逸脱した表現になっていることが発表者によって指摘されました。このことを明確にするため、浦沢直樹の『20世紀少年』におけるネームと完成原稿や『PLUTO』における映画のカメラワークを引合いにして比較が行われました。最終的に石ノ森は、まんがを映画に似せるのではなく、映画の要素を取り入れることによって、まんが独自の表現を生み出そうとしたということがより深く理解されました。質疑応答も活発に行われ、両研究とも意義のある議論が展開されたと思います。

今後の活動計画としては、花園大学を当番校として平成23年5月14日（土）に第63回研究会を開催する予定です。研究テーマ、発表者等詳細は決まり次第お知らせいたします。その後12月に第64回研究会、平成24年3月に第65回研究会を開催する予定です。

また恒例となりました第33回夏期映画ゼミナールを7月29日（金）、30日（土）、31日（日）に京都・関西セミナーハウスで開催予定です。今回は「愛と恋 さまざまなかたち」という表題で、男女の愛をめぐる文字通りさまざま映画を上映します。こちらもプログラムが決まり次第ご案内いたしますので、楽しみにお待ち下さい。

（おおはしまさる／大阪芸術大学）

西部支部

中村 滋延

<報告と計画について>

イメージ・フォーラム・フェスティバル2011

「福岡特別講演」プログラム

（概要）

日時：2011年6月4日（土）

作品上映 17:00-17:50

講演（対談）18:00-19:00

場所：福岡市総合図書館 映像ホール・シネラ

（タイトル）

伊奈新祐 特別講演会

「日本を代表する映像作家が語る、映像の過去・現在・未来—ビデオアートからメディアアートへ」

講師：伊奈新祐

（京都精華大学芸術学部メディア造形学科映像コース教授）

司会：黒岩俊哉

（九州産業大学芸術学部デザイン学科ビジュアルデザインコース

映像アニメーション領域教授）

（主催）

日本映像学会西部支部・福岡市総合図書館・IFF2011

（上映予定作品リスト）：約40分

『流・FLOW (2)』（1983,6min.）

『SHA』（1986,6min.）

『風騒.FUSO (2)』シリ-ズ (1989,6min.）

『Sketch of Kyo(京) vol.2』（1994,8min.）

『女拓 (Nyotaku)』（1997,6min.）

『Crane Performance』（2004,8min.30sec.）

（なかむら しげのぶ／九州大学大学院芸術工学研究院）

東部支部

田島 良一

東部支部総会開催のお知らせ

下記の如く第37回全国大会開催期間中に平成23年度東部支部総会を開催いたします。何卒お繰り合わせの上御出席下さいますようお願い申し上げます。

記

日時 2011年5月28日（土）第38回通常総会後

会場 北海道大学学術交流会館 第37回大会第二通信および5月に
発送される第38回通常総会開催通知をご参照ください。

以上

（たじまりょういち／日本大学芸術学部）

支部・研究会だより 中部支部

池側 隆之

<中部支部 2010 年度第 3 回研究会報告>

3月5日(土)午後2時から、中部支部 2010 年度第 3 回研究会を名古屋市長和区八事にある中京大学・名古屋キャンパスで開催した。中部支部では年 3 回の研究会を実施している。卒業・修了制作の時期にあたるということもあり、過去 4 回に渡ってこの第 3 回研究会では中部エリアの美術・デザイン系、あるいは情報系の大学の学生による作品プレゼンテーションの場を設けている。5 回目となる今年は参加校の数が過去最多となり、広い解釈に基づく「映像」作品の発表が多々行われた。これについては後述したい。

研究会の第 1 部では支部会員による研究発表が 2 本行われた。まず 1 つ目は、楊紅雲会員(名古屋外国語大学 非常勤講師)による「中国映画流通市場における目下の急務—配給体制の市場化と海賊版の撲滅」である。中国映画産業に関わられた経験を持つ楊会員からは、映画ビジネスにおける「製作」「配給」「興行」の 3 つの段階で発生している様々な問題点が指摘され、中国映画産業の目指すべき方向性が提言された。特に、政府系機関に独占されている配給市場が野心的な作品を生む土壌形成の障害となっていること、また大都市圏に集中する映画館が高価な入場料金設定によって富裕層のみの娯楽の場と化し、その影響によって安価な海賊版 DVD の売上が横行していることなどが報告された。「電影管理条例」が目的に掲げる「国民の文化生活を満足させること」に基づき、「配給」「興行」の改革が、ひいては「製作」環境の改善に繋がることなどが示唆された。

2 つ目は、幸村真佐男会員(中京大学情報理工学部)による「素数映画その 1 n 進法による素数分布の可視化」である。幸村会員は、「ウラムの螺旋の事を素数年の 2011 年の新年に知った。それで以前から気になっていた素数進数で素数分布を表現するとどうなるかを確かめてみた」として演算処理によって生成された映像を提示しながら、「特に 1471 進数で表現された素数分布に合成数と素数バンドともいべき 45 度の角度の縞模様が見れた」と報告された。機械化時代の所産である映像は創造と批評というこのメディア独自の特性を有し、そこでは自らを成立させるための構造の構築作業が不可欠である。この構造の発見が新たな表現を生み、これまででない表現への模索が新たな構造を求め、この双対関係への認識が映像メディアに関わるすべての人々の課題であることは周知の通りであるが、幸村会員による創造的構造化過程の提示は、会場に多く詰めかけた学生たちの刺激となったことであろう。

第 2 部の学生作品プレゼンテーションでは、愛知県立芸術大学、名古屋市立大学、名古屋学芸大学、名古屋大学、静岡産業大学、IAMAS、



中京大学(発表順)の学部生と院生が集まり、合計で 16 本の発表が行われた。先に触れたとおり今回で 5 回目となるこの企画では、これまでに倣って、各大学におよそ 20 分の発表時間を提供し、その枠内で自由にプレゼンテーションを行う形式を採用した。ここではただ単に作品の上映だけではなく、必ず口頭でプレゼンテーションをすることが求め



られる。この「ルール」によって、映像表現の多様性が際立つことになる。発表された作品はシングル・チャンネルの映像作品や短編映画から、インスタレーション(会場では記録映像の上映)、さらには紙芝居やスライドショーにも及び、まさに各自の解釈による広義の映像行為が実践・報告された。また個々の作品やプロジェクトは、美術館やギャラリーから商店街、さらにはネットワーク上といった具合に、それらが成立するための発表場所や展開経路が多様に想定されているため、着想から完成に至るプロセスを詳細にわたり報告するプレゼンテーション自体もたいへん興味深く刺激に満ちたものであった。今回の発表者と作品リストは以下の通りである。

●愛知県立芸術大学

伊藤公一の紙芝居「人形の家」| パフォーマンス | 伊藤公一 | 大学院美術研究科博士前期課程美術専攻デザイン領域 1 年
隣人灯舎「悦子の悦び」| スライドプロジェクターを使った絵コンテアニメーション | 大畑蘭 | 同研究科美術専攻デザイン領域 1 年

●名古屋市立大学

CELL | オブジェクト指向プログラミングによる寄せ絵映像 | 内田達也 | 芸術工学部 デザイン情報学科 4 年
瞬きの中、瞬きの外 | 映像インスタレーション | 伊藤明倫 | 大学院芸術工学研究科博士前期課程 2 年

●名古屋学芸大学

地続きの証明 | 映像作品 | 28 分 00 秒 | 新見拓也 | メディア造形学部映像メディア学科映画ゼミ 4 年

●名古屋大学

須田先輩 | 映像作品 | 72 分 00 秒 | 上杉俊輔 | 大学院国際言語文化研究科メディアプロフェッショナル・コース博士前期課程 2 年

Seeking OTSUKA | 映像作品 | 15分00秒 | 木村めぐみ/村松里実 | 同コース
博士後期課程 2年/博士前期課程 1年

●静岡産業大学

曖昧さ回避 | 映像作品 | 1分05秒 | 白井佐樹 | 情報学部 情報デザイン学科 3年

Rain | 映像作品 | 1分30秒 | 吉田梨江 | 情報学部 情報デザイン学科 3年

kuda | 映像作品 | 2分40秒 | 吉田梨江 | 情報学部 情報デザイン学科 3年



●IAMAS

ICONTACT | 映像インスタレーション | 丸山達也 | 情報科学芸術大学院大学 スタジオ2 [タイムベースドメディア] 1年

CJmix (Cloud media Jockey Mix) | Webアプリケーション | 當間忍 | 国際情報科学芸術アカデミーマルチメディア・スタジオ科 2年

●中京大学

矛盾 | 映像作品 | 2分16秒 | 鈴木陽介 | 情報理工学部 情報メディア工学科 4年

The Individual World | 映像作品 | 4分04秒 | 近藤正明 | 情報理工学部 情報メディア工学科 4年

【Auto Diary】 | 映像作品 | 3分44秒 | 小川真嗣 | 情報理工学部 情報メディア工学科 4年

音球 (おとだま) | サウンドインスタレーション | 相川翔 | 情報理工学部 情報メディア工学科 4年

* 作品時間はオリジナルの長さ

4時間にもおよぶ活気ある研究会には約50名の参加があった。終了後には、会員や学生同士の交流の場となるように中京大学内のカフェテリアで懇親会を行った。プレゼンテーションの最中は十分に質疑の時間を設けることができなかったため、学生らは積極的に意見交換を行ったようである。今年初めて東海3県（静岡、愛知、岐阜）の大学が揃ったということもあり、今後は映像表現研究会主催のISMIEとも連携しながら、地域間交流を活性化させたいと考えている。

(いけがわ たかゆき/中部支部担当理事、名古屋大学大学院国際言語文化研究科)

映像表現研究会

伊奈 新祐

<報告と計画について>

現在、映像表現研究会が主催する「インターリンク：学生映像作品展2010」の参加作品から「選抜作品集」(DVD)を作成するために、参加校単位で投票し、その集計作業中であります(3月末)。予定より一カ月程遅れておりますが、第1回目の「ISMIE2010 選抜作品集(DVD)」を今年の大会でお披露目できるように努力したいと思っております。

また今後、海外の大学・学生作品との交流を行うための準備として、今回、松友知香子会員(現在、九州産業大学美術館学芸員)が自らの研究調査を兼ねて渡航先のドイツの大学(ヒルデスハイム大学)で試写会を行いました。昨年度の九産大と京都精華大のISMIE参加作品を中心にアニメーションと実写の10作品程を上映し、ディスカッションを行ってこられました。先方には興味を持っていただいたようで、本格的な交流上映会へと発展させていきたい意向が確認されました。いろいろと事前の準備作業も発生しますが、ドイツ以外の国も含め、海外交流のことを徐々に検討していきたいと思っております。参加各校の会員の皆様のご協力の程、よろしくお願い致します。

(いな しんすけ/映像表現研究会代表、京都精華大学芸術学部)

日本映像学会第36回大会収支報告

大会実行委員会

2010年5月29日・30日・31日に日本大学芸術学部を主催校に開催された第36回大会の収支は以下のとおりです。

項目	金額	内訳
収入の部		
大会参加費 会員	¥990,000	198×@5000
大会参加費 一般	¥36,000	36×@1000
概要集	¥14,000	14×@1000
懇親会費	¥565,000	113×@5000
弁当代	¥26,800	26×@1000、1×@800
エクスカーション	¥100,000	20×@5000
学会補助費	¥400,000	
計	¥2,131,800	
支出の部		
通信費	¥137,285	郵便料金等
印刷費	¥830,015	第2通信、封筒、コピー、報告書等 ※尚、概要集は芸術学部の補助を得て印刷いたしました。
食費	¥82,002	スタッフ、エクスカーション食事等
懇親会費	¥565,200	
交通費	¥85,400	エクスカーションバス代
用品事務費・会場設営	¥122,440	発表用コード類、記録用メディア等
雑費	¥25,058	エクスカーション入館料他
講師謝礼	¥100,000	
アルバイト等件費	¥184,400	
計	¥2,131,800	
差引残高	¥0	

以上

関西支部第 61 回研究会〔2010 年 12 月 11 日・神戸大学人文学研究科 B 棟 132 教室〕

瞬間、身体、連続

——アルベール・ロンドの写真実践について

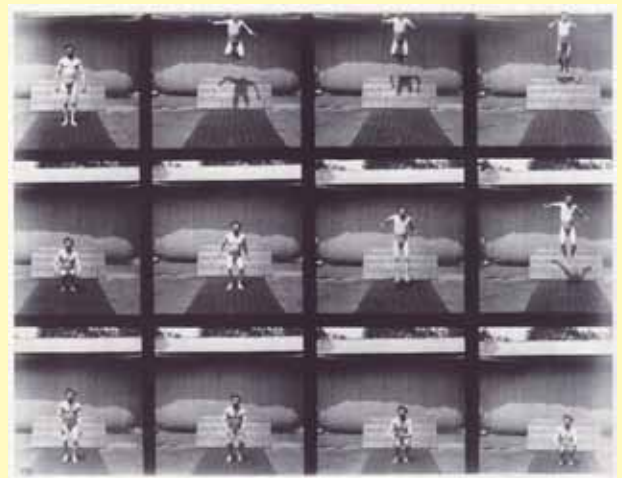
増田 展大

本発表は、19 世紀末フランスの写真技師であるアルベール・ロンド (1858-1917) について、彼の連続写真開発とその医学への適用についての実証的な考察を試みたものである。アルベール・ロンドは、1880 年代の瞬間写真の技術開発を先導したアマチュア写真家であり、神経科医ジャン＝マルタン・シャルコーのもとで『医学写真』を著した写真技師、さらには、植民地先の原住民を計測するかのよう撮影した人類学写真家としても知られている。しかしながら、その多様な活動にもかかわらず、しばしばエティエンヌ＝ジュール・マレーやエドワード・マイブリッジの名に隠れた彼の仕事は、従来の写真／映画史の余白で取り扱われるに過ぎなかった。そこで発表者は、とりわけシャルコーのもとで彼が実践した連続写真の開発過程に着目し、それを写真装置による身体表象という観点から再考することで、19 世紀末の写真イメージと臨床医学的な知の結びつきの一端を明らかにすることを試みた。

本発表の具体的な目的は、以下の二点となる。まず、先行研究にみられる映画史や写真家自身の物語へと収斂しがちな議論に対して、マイブリッジやマレーとの比較分析からロンド式連続写真を相対化する。また、18 世紀末における視覚性の断絶を唱え、19 世紀特有の視覚の様態を論じたジョナサン・クレーリーの議論を参照しつつ、そこに初期映画研究の視座から視覚文化についての議論を展開するトム・ガニングの議論を批判的に付き合わせ、現代の映像論における連続写真研究の位置付けと意義を明らかにする。そのための手続きとして発表者は、連続性を裏切るかのように並んだロンド式連続写真の特異性、写真の間隙に注目し、そこに浮かび上がる臨床医学的な物語性や美的バイアスを指摘した。ま

た、運動する身体の記録手段としてのロンド式連続写真の独自性や、同時代に利用されたグラフ法との平行性を指摘することで、19 世紀末の観察者と写真装置との関係性が明らかになる。

これらの考察によって、写真装置とそれを取り囲む身体との関係性、さらには、19 世紀における知ることと見ることとの結びつき、そのズレを具体的に確認することが可能となる。このような映像技術の歴史的考察は、現代における視覚文化研究や医学における画像診断などの実践にも反省的考察を迫ることになるだろう。



(ますだ のぶひろ／日本学術振興会特別研究員、
神戸大学博士課程後期課程)

東部支部第 50 回デジタルメディア研究会／映像教育研究会〔2011 年 1 月 26 日・東京大学大学院情報学環暫定アネックス 1F 講義室〕

SIGGRAPH Asia 2010 および伯日デジタル放送推進シンポジウムに関する報告

河口 洋一郎

開催日時：2011 年 1 月 26 日 (水) 18:00～19:30

スピーカー：為ヶ谷 秀一 (女子美術大学)

コーディネーター：河口洋一郎 (東京大学)

会場：東京大学大学院情報学環講義室

主催：日本映像学会デジタルメディア研究会／映像教育研究会

デジタルメディア研究会および映像教育研究会の合同企画として、2010 年 12 月に相次いで開催された国際学会「SIGGRAPH Asia 2010」および、国際シンポジウム「The 1st Brazil Japan Symposium on Advances in Digital Television」への参加報告を中心に、高精細映像およびコンピュータ・グラフィックスの最新事情に関する研究会が実施された。なお、スピーカーの為ヶ谷教授、およびコーディネーターの河口はともに 2 つの学会・シンポジウムに参加しており、充実した内容の研究会となった。

1. SIGGRAPH Asia 2010 in Seoul

「SIGGRAPH Asia 2010」は、今回で 3 回目となるアジア地域での ACM-SIGGRAPH 国際大会であり、韓国ソウル市の Coex Conference & Exhibition Center に於いて、2010 年 12 月 15 日～18 日 (機器展示会は 16 日から) の 4 日間開催された。ソウル市は、2010 年から 2012 年までの World Design Capital に選定されており、それに関連して多くのデザインイベントが開催される中、その一環として「SIGGRAPH Asia 2010」も開催された。主催者発表によると、45 カ国 7,600 人を超える参加者があったと報告されている。

2008 年にシンガポールで始まった SIGGRAPH Asia も、翌 2009 年は横浜で、3 回目となる今年はソウルで、と年々参加者も増えて来ている。特に、各開催地とも若い学生や研究者たちの参加が多く見受けられることから、開催地が身近にある事と共に、アジア地域での CG 関連産業への関心の高さと、さらなる発展への期待などが見て取れる。

コンファレンスは、通常の SIGGRAPH と同様にコース、技術論文発表、テクニカルスケッチおよびポスター発表等が行われ、また優れたアニメーション作品の上映を行うコンピュータ・アニメーションフェスティバルも設けられている。しかし、ソウル大会ではアート・ギャラリーとエマージング・テクノロジー (ET) は開催されなかったため、より論文発表等に集中したアカデミックな学会の雰囲気を感じ出していた。

機器展示会では、地元韓国企業を中心として 75 社が出演し、入場料が比較的廉価になっており、専門学校や大学生など学生も多数入場していた。また、韓国の CG 分野に関わる多くの教育機関がブースを出しており、日本からも神奈川工科大学や東京芸術大学、東京大学などがブースを出していた。

韓国ではプロダクションと学校とのコラボレーションも国策として積極的に進められており、今大会で多数開催されたチュートリアル・セッションでは、制作を志す学生等の熱気が溢れ、ここでも韓国における CG 分野に対する関心の高さを確認できた。技術の進化と共にコンテンツのクオリティ向上に対する制作者の意識も高まって来ており、今後のさらなる発展が期待できる大会となった。

2. The 1st Brazil Japan Symposium on Advances in Digital Television

地上波デジタルテレビジョン放送におけるブラジルと日本との科学技術協力および相互発展のために、2010 年 12 月 6 日～8 日、ブラジル、サンパウロ市のサンパウロ大学ブタンタンキャンパスにて、記念すべき第一回大会が開催された。

本シンポジウムは、サンパウロ大学応用科学科 (EPUSP: Polytechnic School of University of Sao Paulo) の統合システム研究所 (LSI: Integrated Systems Laboratory) が、技術統合システム研究協会 (LSI-TEC: Technologic Integrated Systems Laboratory Association) の協力と国家科学技術開発審議会 (CNPq: National Council of Technologic and Scientific Development) の助成により主催したものである。

日本からは為ヶ谷教授、河口のほか、黒木義彦氏 (ソニー株式会社技術開発本部)、川添雄彦氏 (NTT サイバーソリューション研究所)、杉沼浩司氏 (映像新聞論説委員)、Gabriel Porto Villardi 氏 (独立行政法人情報通信研究機構) が登壇し、高精細映像技術、3D 映像、コンテンツ配信システム等、専門的見地から講演を行った。

ブラジルの地上波デジタルテレビジョン放送の方式 (SBTVD-T) は、日本方式 (ISDB-T) を基礎として採用し、ブラジルでの要求条件に沿って技術改良を行ったものであり、日本で開発された技術が日本以外の国の標準方式として採用された意義は大きい。日本・ブラジル方式とも呼ばれ、他の中南米国 (アルゼンチン、ペルー、チリ、ベネズエラ、エクアドル、ボリビア、パラグアイ、ウルグアイ、コスタリカ、ニカラグア) およびフィリピンで放送開始または採用が決定している。さらにブラジルは、日本・ブラジル方式のアフリカ諸国での採用を積極的に働きかけており、放送設備産業および電子機器産業の市場拡大という経済的な側面からも注目に値する。

このような状況の中で、日本とブラジルにおける、デジタルテレビジョン分野の先端的研究発表と継続的な情報交換の機会の確立と、国際的な機関間の協力関係構築の促進を目的とし、研究者、開発者および起業家が交流することによる知見の蓄積と革新的ソリューションを形成する環境を創出しようという試みは、科学技術および経済の両面において非常に重要であり、今後の動向が注目される。



為ヶ谷秀一教授による「SIGGRAPH Asia 2010」の報告



The 1st Brazil Japan Symposium on Advances in Digital Television での発表の様様。河口 (左) を紹介する大会委員長の Marcelo Knörich Zuffo 氏 (右) 於サンパウロ大学



河口による 8K Ultra High Definition (7680 × 4320pixels, 60fps) CG 映像作品『Shelly』超高精細な CG による濃密なる表現はブラジルにおいても大きな注目と反響を得た。

以上

(かわぐち よういちろう／デジタルメディア研究会代表、
東京大学大学院情報学環)

フォーラム

■ 藝術学関連学会連合第6回公開シンポジウム テーマ：アートとデザイン — その分離と融合 —

趣 旨：

藝術学関連学会連合シンポジウム、第6回目の今年は、「デザイン」をおもなテーマに開催します。藝関連に先駆ける藝研連シンポジウム以来今回まで、それが中心テーマとならなかったおもな理由は、「藝術」といいながらも、じつは広く「アート」や「アーツ」ではなく、「ファイン・アート」や「ファイン・アーツ」といった言葉が示唆する、純粋に美的な鑑賞の対象としての藝術を想定するという思い込みにあったのかもしれませんが。「デザイン」には生活や環境あるいは機能といった現実空間や実社会または実世界との強い関連があり、それは純粋に美的な鑑賞の対象ではありません。

しかし、「ファイン・アート」はいわば近代の産物です。制作品が役立つか役立つまいかといった違いを超えて、私たちは元来「アート」を共有してきました。藝術を「ファイン・アート」等、特定の領域に限るのは、歴史的にも、その将来を考えても、有意義なことではないでしょう。最近では、社会的課題にクリエイティブに取り組む「ソーシャル・デザイン」が唱えられ、エンターテインメント・プロジェクトが「グッド・デザイン」に選ばれるなど、「デザイン」は急速にその意味を拡大しています。また、「アート」観も拡大しています。実用的あるいは道具的な意味でというよりも、社会的あるいは環境的に役立つ「アート」、あるいは生きる喜びを与えたり、社会参加やコミュニケーションを促進したりする「アート」が世界各地で試みられています。

何が「アート」と「デザイン」を分けているのでしょうか。それは政治や教育などの制度でしかないのではないのでしょうか。クリエイティブな思考や活動がこれまでになく求められているいま、その分離は有効なのでしょうか。「デザイン」は藝術ではないのでしょうか。その「生活」「環境」「機能」といった側面との関連のあり方を問い、また、同時に、それらと藝術との関係を問い、「デザイン」という視点から、逆に、藝術とは何かという問題、あるいは、教育や文化政策における「アート」と「デザイン」との融合の可能性といった問題にまで議論の輪を広げることができれば幸いです。

日時：2011年6月18日(土) 13:00 - 17:00

場所：大阪大学法経講義棟第5講義室（または大阪大学会館講堂）

□ 開会挨拶

西村清和（東京大学：藝術学関連学会連合会長）

片山 剛（大阪大学大学院文学研究科：共催者代表）

シンポジウム趣旨：黒川威人（日本デザイン学会）、

藤田治彦（大阪大学：意匠学会）

□ ゲスト・パネリスト

黒川雅之（黒川雅之建築設計事務所）

報告「デザインとは何か - そのありようを問う」

編集後記

総務委員会

■ 3月11日、突如として東日本を襲った巨大地震、巨大津波、原発事故の三重苦。以後、多様なメディアでニュース報道が切れ目なく続いた。新聞は即応力に劣り、週刊誌はさらに遅れる。テレビカメラであれ携帯カメラであれ、動画や写真など映像の迫真性、現場性、視覚的わかりやすさに比して文字情報は後手後手となる。しかし、災害に伴うサウンド、ノイズ、喚声は別として、画面に伴う報告や解説は映像に意味を付加し、後手に回る文字情報でさえ未曾有の被災状況、その原因、救援対策などを読者に知らせ、考えさせ、行動を促す。映像と言葉、映像と文字は互いに補完しあうことをいまさらながら痛感した。「映像」学会のこの会報、各研究会ははじめ「文字情報」が詰まっている。余震は困るが、研究会の余波は広まってほしい。（岩本憲児）

□ パネリスト

竹内育子（大阪大学：意匠学会・美術史学会推薦）

報告「19世紀イギリスに見るアートとデザイン？官立デザイン学校を中心に？」

森 仁史（金沢美術工芸大学：美術史学会・意匠学会推薦）

報告「アートとデザイン？日本の場合？」

竹原あき子（和光大学：日本デザイン学会）

報告「デザインの現在 - 日本デザイン力は取り戻せるか」

□ ディスカッション 司会・コーディネーター

藤田治彦・黒川威人

主催：藝術学関連学会連合 { 意匠学会 / 国際浮世絵学会 / 東北藝術文化学会 / 東洋音楽学会 / 日本映像学会 / 日本演劇学会 / 日本音楽学会 / 日本デザイン学会 / 比較舞踊学会 / 美学会 / 美術科教育学会 / 美術史学会 / 舞踊学会 / 広島芸術学会 / 服飾美学会 }、日本学術会議哲学委員会・芸術と文化環境分科会

共催：大阪大学大学院文学研究科

会場アクセス：

阪急電車宝塚線「石橋駅」下車徒歩10分（大阪モノレール「柴原駅」下車徒歩15分）

以下のアクセスマップをご参照ください。

<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/access/toyonaka.html>

④ 大阪大学総合学術博物館

⑨ 大阪大学会館講堂

④ 法経講義棟第5講義室

併催行事：大阪大学創立80周年記念展覧学会

（大阪大学総合学術博物館：11:00-12:00）

「阪大生・手塚治虫—医師か？マンガ家か？—」

以上